

称 名

——念仏と関連して——

秋 本 勝
(京都女子学園)

1

今回のテーマである「祈り」の定義はさまざまであるが、一般的には、現世利益的な祈願請求の意味で強く受け取られているように思われる。

しかし、それだけではないもっと心の深みからの叫びであるとも言われてきた。坂東性純は、「祈りは人間霊性の最奥の叫びであり、人間精神の根元に深く係わり合いを持っている」と言われ、鈴木大拙は「祈りは業繫にいて業繫を離脱せんとするもの、霊性的なものから出てくる衝動である」と言われている⁽¹⁾。

祈りはもともとキリスト教における人と神との交信・対話という意味であるにとらえがちに思われるが、上のようにもっと広い意味で、神だけでなく、仏、真理、自然等々への人の崇敬の念、帰依の念、さらには救済等の利益成立のときなどにとらえてもよいのではないかと思われる⁽²⁾。

仏教では、称名は念仏と密接に関係し、古くから身に礼拝し、口に南無仏と称え、心(意)に仏を想うということが行われてきたことから、称名ないし念仏は一般的に仏教における広義の祈りと考えてもよいと思われる。

因みに、坂東性純は『フィロカリア』という4世紀～14世紀に称名を実

踐の柱とした教父たちの伝説と教説を集成したものと深い関わりをもつ、ある修道士の書であろうとされる祈りの書を紹介しておられるが、そこではキリスト教においても祈りにおいて称名即ち名を称えるということが非常に重要なものとなっていることがうかがい知れる。

以上のようなわけで、仏教の称名について取り上げるに至ったが、以下では特に念仏と称名との関係を中心に少し考えたいと思う。

2

称名について念仏との関係において考えるとき、まず浄土教、特に善導以降、念仏即称名とされたという点を意識せずにはいられない。この称名念仏思想が果たして善導にのみ認められる特異な解釈であったかどうかというものは一つの大問題である。

かつて津田左右吉は善導の書き換え、すなわち、『無量寿経』（康僧鑑訳）第十八願文中の「乃至十念」を善導が『往生礼賛』等で「称我名号，下至十声」等として念仏を称名と釈したことに対して、「極めて不忠実な、恣な、また甚しく不用意な、しわざであつたに違ひない」と批判したとい⁽³⁾う。

このような批判に答えることは必ずしも容易ではないが、今日明らかにされつつある念仏と称名との密接な関係から見ると、上述のように全く恣意的な書き換えとは言い難いと言ひ得るであろう。いずれにせよ、このような論争に今深く立ち入るつもりはないが、そのような問題も踏まえながら、このいわゆる称名念仏思想について一定の必然性があつたであろうことについて一考を加えておきたい。つまり、称名は念仏（憶念、思念、心念）とともに古くから、行われていたこと、称名による得益もまた、念仏

と全く同様に説かれてきたことなどに留意しながら、念仏と称名とのきわめて密接な関係から、今言うところの最終的な称名念仏に至るまでのプロセスとその必然性について確認しておきたい。

善導の称名は言うまでもなく、『観無量寿経』によるが、称名による利益、即ち滅罪そして浄土往生がその経に説かれている。しかし、『観無量寿経』（曇良耶舎訳）には、「智者復教合掌叉手称南無阿弥陀仏。称仏名故、除五十億劫生死之罪。」（大正 12, 345c）、また、「如此愚人、臨命終時遇善知識種種安慰為説妙法教令念仏。此人苦逼不遑念仏。善友告言、汝若不能念（彼仏）者応称（帰命）無量寿仏。如是至心令声不絶、具足十念称南無阿弥陀仏、称仏名故、於念念中除八十億劫生死之罪。」（大正 12, 346a）とあり、ここには称名と念仏とが同一視された記述があるわけではない。したがって、念仏即称名を明確にしたのは善導に違いない。

この経には「称南無阿弥陀仏」と出てくるが、この形の称名による滅罪が説かれていると同時に、「念仏ができないものは称名せよ」とあって、いわば称名の易行性を説いていると言える。善導はこの称名を、無量寿経第十八願文中の「十念」と同一視して、十念＝十声、つまり念仏即称名とした。しかし、それは恣意的な解釈あるいは錯誤によるものであったのか。その問いへの答えは否定的なものとならざるを得ないと思われる。

そこで、以下では、称名および念仏の用例を見ながら、称名即念仏に至る過程を辿ろう。⁽⁴⁾

3

まず、ウダーナ（感興語）としての口称の例として以下のものが挙げら

れる。

原始経典では『中部』 *MN*, 27, I, p. 177 (『中阿含』 32, 大正 1, 656c) など、

...udānam udānesi namo tassa bhagavato arahato sammāsambud-
dhassa...

とあり、南無仏を三度称えるものがある。

大乘経典でも『大阿弥陀経』(大正 12, 316c) には

「心大歓喜踊躍…皆言南無阿弥陀三耶三仏檀」

とあり、これも後にあるような特段の得益が説かれているわけではない。

次に、称名の得益を示すものとして以下のようなものが原始・部派仏教文献に見出される。

『増一阿含』 24 (大正 2, 674b)・44 (大正 2, 789bc) などに、「称南無仏」により「得好音声」・「皆来至我所」などと得益を説く。

また、同様に『増一阿含』 26 (大正 2, 316b)・47 (大正 2, 804c/805c) などに、「自帰称喚如来名号」により生天・「称南無」により辟支仏となる・「称南無仏」により「除去諸苦惱」などと説く。

しかし、これらは相当パーリ文献にはないので後世の付加であろうと言われている。

『マハーヴァスツ』 (*Mv*, ed. E. Senart, I, p. 245) には、

...namo buddhasyēti udiretha...namo buddhasyēti vighuṭṭam...

とあり、南無仏と称えて危難を免れたことが説かれている。この類例として、『アヴァダーナシャタカ』 (ed. J. S. Speyer, II, p. 63)・『賢愚経』 4 (大正 4, 379b)・『雜譬喻経』 (大正 4, 529ab)・『分別功德論』 4 (大正 25, 45bc)・『大智度論』 7 (大正 25, 109a) などがある。

大乘經典では以下の通りである。

『大阿弥陀經』(大正 12, 316b)・『無量清淨平等覺經』(大正 12, 298b) などに、「南無阿弥陀三耶三仏檀」など言うことにより病が癒えたと説かれている。

『觀無量壽經』には、称名により除罪があることが説かれることは既に述べたとおりである。

『法華經(方便品)』(Sp, ed. H. Kern and B. nanjio, p. 52) には、南無仏と言えは最上の菩提に達するということが説かれる。ただし、原文に「称」はない(namo 'stu buddhāya kṛtakaikavāram...)。

『無量壽經』『宝積經如来会』『無量壽莊嚴經』には今問題とする称名の語は見られない。

ところで、龍樹作という『十住毘婆沙論』(易行品)における「称名」が原語としても「名を称える」という意味のものであるかどうかは不確定であるが、もし原語でも称名ということが確実であるなら、称名は易行としてその地位を確保したことになる。しかし、そのことが直ちに仏憶念としての念仏とつながるものではなく、⁽⁵⁾『無量壽經』などの念仏と直接つながるものではない。

念仏は、その由来として原始仏教以来の三念、六念、十念の第一に挙げられるものであり、原語としては anusmṛ-, smṛ-⁽⁶⁾(随念、憶念)である。

『相应部』11.3(对出家者), 55.21(对在家者)などには、念仏の除難的効力が説かれる。

『無量壽經』『阿弥陀經』における念仏の「念」の原語は[sam] anusmṛ- (随念、憶念), manasikṛ- (作意), citta (『無量壽經』, 『無量壽如来会』の「十念」, 「一念」の念) などである。羅什訳『阿弥陀經』の「執持名号」

は nāmadheyam...manasikariṣyati (ed. F. M. Muller, p. 96) である。

4

称名と念仏とがともに説かれる例を見ると以下の通りである。原始・部派、大乘それぞれの文献に現われる。

『相応部』 2.9/2.10 (SN, I, p. 50/51) には、

...bhagavantam anussaramāno tāyaṃ velāyaṃ imaṃ gātham abhāsi namo te Buddha vīr' atthu... 「…世尊を随念しつつ、その時この偈をとなえた—『ブッダよ、雄者よ、あなたに帰命します。…』と。」とあり、アスラ王ラーフに捕えられた月天子が、念仏し、帰敬偈をとなえたと難を除かれたことが説かれている。

ただし、相当漢訳『雜阿含經』 583經 (『大正藏』 2, 155a), 『別訳雜阿含經』 167經 (同 436a) には随念はない (相当梵文, チベット訳も⁽⁷⁾)。念仏がないのは、それらの文献では「稽首仏足, 退住一面, 説偈歎仏」あるいは「頂礼仏足, 即説偈言」と、直接ブッダに対面している場面だからであろう。

ここに念仏と称名との同時性あるいは密接な関係性が見られる⁽⁸⁾。

『ウダーナ』 2.10 (Ud, pp. 18-20) にもその類例が見られる。

『アパダーナ』 (Ap, p. 430) には、

...buddhaseṭṭham anussaraṃ / gotamo ti mahāghoṣaṃ sutvā tehi udīritaṃ... 「…最勝の仏を随念した。ゴータマと彼らが大声を上げるのを聞いて…」

とあり、同様に念仏と称名との密接な関係が見られる。

『雜譬喻經』 (大正 4, 529ab) にも「…發大声称南無仏…但一心念仏暫称

名号」⁽⁹⁾とあり、漢訳ではあるが類例と考えてよいであろう。

大乘文献でも以下のようなものである。

『七百頌般若』(ed. G. Tucci, p. 134) には、

...tathāgataṃ manasikuruyāt tasya nāmadheyam gr̥hitavyam 「…
如来を作意するならば、その名をとなうべきである」

とあり、曼陀羅仙訳では「繫心一仏専称名字」となっている。

『法華経(普門品)』(Sp, p. 439/440) には、

...ākramaṃ kuryāt... 「観自在菩薩大士〔の名〕を呼号する〔ならば〕…」

あるいは

...nāmadheyagrahaṇena... 「観自在大士の名をとなえることによって」

とあり、羅什訳はいずれも「称観世音菩薩名」である。これに対応する詩句(geya)の部分ではいずれも ...smarato 'valokiteśvaram... (「念彼観音力」)であり、詩句にある念仏が散文において称名と置き換えられているわけで、念仏と称名とがここでは同一視されているとも考えられる。⁽¹⁰⁾

『ガンダヴェーハ』(Gv, ed. T. Suzuki and H. Idzumi, p. 154) には、

...amoghānusmṛtinām ...amoghanāmadheyagrahaṇānām... 「憶念すること…名号を称えることに空しくない(すべての衆生たちにとって、もし彼らは〔仏に〕出会うことによって、すべての煩惱は消滅する)」

とあり、漢訳『四十華嚴』(大正 10, 712a) にも「…若憶…若称名」、また、『八十華嚴』(大正 10, 355a) にも「…若憶…若称名号」とある。

『大乘莊嚴經論』(ed. S. Levi, p. 83) には、

...tathāgatasya nāmadheyagrahaṇamātreṇa... 「(無垢月光如来の) 名を称えるだけで(無上正等覺に決定したものとなる)。」(大乘經典

からの引用として)

とあり、波羅頗迦羅蜜多羅訳(大正 31, 621a)では「…称念無垢月光仏名、決定当得作仏。」となっていて、「称念」という訳語が注目される。

以上のように、原始經典から部派仏教文献、さらに大乘經典、大乘論典に至るまで、念仏と称名とが同時にきわめて密接に関係性をもって説かれていることが明らかである。

また、仏教以外のインド文献においてもその密接な関係が既に指摘されている。⁽¹¹⁾

まず、『バガヴァッド・ギーター』(Bg, VIII. 13)には、

...om ity ekākṣaram brahma vyāharan mām anusmaran... 「オームという一音のブラフマンをとなえつつ私を随念しつつ、(現身を捨てて死んでいく者、かれは最高の帰趣に到達する。)」

とあり、となえながら随念することが明らかに説かれている。

『ヴィシュヌ・プラーナ』には、

「精神を集中して誦唱さるべきもの (japatavyam) (I. 11.53)」 「意を集中して祈りを唱えながら (kurvan japam) (I. 15.53)」 「一心に余念なく誦唱によって (japais) (III. 18.54)」 「誦唱 (japa) において、ある者の心が Vāsudeva にあるとき (II. 6.39)」⁽¹²⁾

とあり、ここにも念と称との密接な関係が見て取れるのである。

5

上に見てきたように、仏教の伝統のなかで称名はまず感興語という形ではあれ、ブッダへの帰依を表明することが説かれ、さらにそのことが何ら

かの得益をもたらすものとして古くから説かれるようになったと考えてよいであろう。また、称名は念仏と一緒に説かれることも多く、仏を憶念しその名を称えることが一体のものとして考えられていたこともまた明らかである。また、仏教以外の文献にもその称と念とが、仏教と同様に一体のものとして説かれる例もいくつか知られることから、口に名を称え、心(意)に憶念し、さらには身に礼拝する(このことは今回触れていない)ということがおそらくはインドで一般的に行われたものであったのであろう。それはまた祈りの一般的な形であったとも言えよう。

そのような伝統は中国の善導につながる浄土教の伝統の中でも受け継がれ、最終的に念仏即称名ということが善導によって説かれたこともまた全く無理なこじつけでもないことは明らかであろうと思われる。

今回祈りをテーマとして称名について考えて見たが、先学の仕事によるところがほとんどであった。今後、易行という観点からの称名や念仏などの伝統についてももう少し踏み込んだ考究を進めたいと考える。

注

- (1) 坂東性純『「イエスの御名を称えることについて」—キリスト教と仏教の称名』(『大谷大学研究年報』24, 1971)および『「巡礼の道」における称名思想』(『印仏研』23-1, 1974)。
- (2) 『宗教学辞典』(東京大学出版会) p. 31: 「祈りとは広義において人間と神との内面的交通、生ける人格的接触、対話である」(大峯顕)。
- (3) 藤田宏達「念仏と称名」(『印度哲学仏教学』4, 1989) pp. 3-4 参照。この論文に負うところが多く、今回、その趣旨にはば賛同する立場で論じた。
- (4) 主に以下の論文を参照した。奥田真隆「ヴィシュヌ・ブラーナの憶念—念仏思想との対比において—」(『日本仏教学会年報』44, 1978), 小丸真司『「観無量寿経」と称名思想』(『仏教思想の諸問題(平川彰博士古稀記念論集)』1985), 香川孝雄「称名思想の形成」(『印仏研』11-1, 1963), 香川孝雄『浄土教の成立史的研究』(pp. 235-261), 藤田宏達『原始浄土思想の研究』(pp. 537-565), 藤田宏達「念仏と称名」(『印度哲学仏教学』4, 1989),

真野龍海「浄土教經典の文献学的研究—阿弥陀，称名について—」（『仏教文化研究』21，1975），水野：水野善文「インドの称名」（『空と実在（江島恵教博士追悼論集）』2000），向井亮海「龍樹造『十住毘婆沙論』易行品の称名説—称名念仏の源流について—」（『天台真盛宗宗学研究所紀要』5，1997）など。

- (5) 向井亮海・上掲論文は，易行品の「称名」を原語からも称名であることを明示しておられる。私の学会発表時にはレジュメに挙げながらその論文の内容に言及しなかったため，龍谷大学教授相馬一意氏よりその旨のご指摘があった。不言及については私のミスであったことをここに詫びたい。ただ，念仏との関係に主要な関心をおいたためでもあったことをここに記しておきたい。
- (6) 藤田宏達「念仏と称名」（『印度哲学仏教学』4，1989）p. 8～参照。
- (7) 藤田宏達・上掲論文 pp. 13-14。
- (8) 藤田宏達博士は「仏随念(念仏)と南無仏という口称が同時的に行われたわけで，ここには「念」と「称」との同一視がはっきり認められるといってよい。」と述べておられる。「同一視」という表現が妥当かどうか疑問であるが，今は同時性，密接な関係性と理解しておきたい。
- (9) 藤田宏達・上掲論文 p. 15 にも「漢訳文ではあるけれども，念仏と称名との同一視を示してものといってよい。」とある。
- (10) 藤田宏達・上掲論文 p. 22 には「もっとも，「普門品」の詩句は散文とは表現的に一致していないし，竺法護訳には詩句の部分欠いている点から，後に詩句が附加されたと見られるが，その場合，散文に対応させて詩句が成立したか，それともすでに独立に成立していた詩句をそのまま附加したか，という先後関係の問題点は残るにしても，ここには詩句の「念」が散文の「称」と同じ意味で対応させられていると見ておそらく間違いない」と述べられている。
- (11) 藤田論文以外に，奥田論文等参照。
- (12) 奥田真隆・上掲論文 p. 10。